V S

早希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＶＳ

【Ｎコード】
Ｎ７２９２Ｄ

【作者名】
早希

【あらすじ】
「好きです！」「嫌いです」
少年少女の愛の攻防戦　と、それを見守る人びとの話。

彼の想いとその情熱

「好きです！」

「嫌いです」

こんにちは、僕は鴨居浩太郎（カモイコウタロウ）って言います。
今の場面は…お恥ずかしながら、愛する先輩に直球で告白し見事に玉砕した場面です。
通算２４回目。
初めて告白したのが入学後少し経ったときでしたから、そろそろ５月の半ば…あぁ初夏にさしかかろうとしていますね。

あ、その先輩のことを言い忘れてました。いけないいけない。
先輩の名は春日井奈々（カスガイナナ）。僕より１つ上の２年生です。
とっっっても可愛らしい名前でしょう？
その容姿は見るものを虜にし、目が合った瞬間茹蛸状態のようになること間違いなしってくらいの和風美人さんです。
右目の側にある泣き黒子、腰まで流れるように整った真っ直ぐな髪、か細い印象を受けるけれど、実は結構背が高くて凛としている、などなど。
先輩の魅力はまだ沢山あるのですが、これ以上言い続けると終わりそうにないのでこの辺で。
とにかく、ものすごく素敵な方です。

こんな風に言ってますが、実は僕、入学当時は先輩のこと、少し苦手だったのです。

とっても美人さんなのですが、その周りに漂う雰囲気が、少し恐くて。
入学当時、学校のことを教えてくれた先輩からにも遠まわしに近づかない方がいいよ、と言われたこともあって、僕の中では近寄りがたい存在だったんです。

それが変わったのは。

僕と先輩が同じ図書委員での仕事を任されたときでした。
そのとき僕は…自分で言って情けないのですが、ビビってました。
ものすごく。

図書委員の仕事は主に書棚整理とカウンターの受付。
書棚整理はそれぞれの持ち場を与えられて個々に活動するのですが、カウンター当番となると、その、隣同士に座って作業をするんです。
効率がいいだとか。単に場所が狭いせいだと思いますが。

僕は非常にあせってました。
とても綺麗な方だけど何考えてるのかよくわかんない、そんな風に先輩のことを思っていたのですから。
だから、そのときの僕はすごく挙動不審だったんだと思います。
時々発せられる言葉にビクッとしたり言葉遣いが変だったり、視線を合わせないようにしたり。

でも、一緒に作業しているうちに気づいたんです。
ビクビクオロオロしている僕に対して、幾度となく話しかけてくれ、僕の反応が悪くても気にせず、それどころか、まだ慣れない仕事に戸惑っている僕のためにさりげなくフォローを入れてくれて。
それに気がついたとき、思わず泣きそうになりました。

少なくとも、僕は、先輩に対して決して良い反応をしてないのに、先輩はそのことに気づいてるはずなのに、それでも先輩は見て見ぬふりをして僕を気遣ってくれた。
それなのに、周りの反応と第一印象のせいで先輩のことをあまり良く思っていない自分自身が本当に情けなく思ったんです。

不思議なことに気づいた途端先輩のことが段々見えてきたのです。
時々発せられる言葉は一言ずつだけど、よく考えてみればその内容は的確で仕事のやり方がわからない僕のためにわかりやすく言ってもらっているということ。
話す必要があれば話すし、必要でないならば話さない。
先輩は…ただ当たり前のことをしているのであって、決して怖い行動をしてるわけでは、ない。

話す頻度だって人それぞれだし、先輩はきっと、ただ話すことが少ない人なのではないでしょうか。
そんな風に思うことはすごく傲慢で不躾だけど、それでも、少なくとも先輩は皆が言っているような冷たい人じゃない。

とても優しい人なんだ。
そう思っているうちに、何だか、顔や耳が熱くなってきて…。
恋に、落ちてしまったのです。

恋と自覚したのが先輩とカウンター当番をしている時だったから、余計に顔を見られるのが恥ずかしくて。
表情は変わっていないように見えて、でもさりげなく僕の様子を案じてくれてる先輩。
それも分かると余計顔が熱くなってきちゃって。もう、心臓バクバク、隣に先輩がいるって改めて思っただけで余計にし、心臓の音が…。

なんてそんな僕の感情はいいのでした。
とにかく、そんなことがあって、先輩への見方が変わり、そして恋してしまったのです。

こんな感情になったのは初めてで、でも恋したということには間違いなくて、もうどうしようもなかったのですが少しでも先輩と仲良くなれるように、が、頑張って下の名前で呼ぶようにしました。
それを聞いたときの先輩が苦笑するのは忘れません。
先輩の笑顔って貴重なんです。めちゃくちゃ可愛いのです。

好きになってから気づいたことですが、先輩は図書当番以外でも図書館にいます。
ちょうど、夕方辺りで人がいなくて静かなとき。
僕もよく放課後本を読むし、先輩といたいという欲もあったため、ある日隣で本を読ませてもらおうと思って声をかけたら怒られました。怒鳴られ、涙ぐみました。
…先輩、そんなに本読む邪魔が嫌いなんですか？

先輩、少女漫画とかも読むんだなーと思いながら迎えた夜。
このままでは、毎週1回の委員会の仕事でしか先輩に会えない。
この時既に僕は先輩と毎日いたい衝動に駆られてました。
会いたい会いたい会いたい。

それに、先輩は少し恐れられてるみたいだけど、絶対影じゃ人気のはずだ。
こんな所で躊躇していたら誰かに攫われてしまう！

そう思って、翌日、告白する決心をしたのです。
…まぁ、結果は無残なものでしたが。

そして、
ご覧の通り、２４回告白し２４回ともバッサリ斬られている僕。
普通なら1回2回で容赦なく断られたら可能性も何も無くあきらめるかもしれません。
その方が、告白する側にとっては傷は浅く済むのですから。しつこい男って嫌われそうですし。

それでも、僕はあきらめきれないのです。
どんなに手酷く振られても嫌いになれず、むしろどんどん好きになっていくばかり。

それに、まだ告白したりないくらいです。
それに。
先輩は僕の嫌な態度にもめげずに話してくれた。
だから、僕もめげずに想いを伝えようと決めてるんです。

先輩が恋愛対象として見てもらえるのはかなり低い確率ですが…（僕ちっちゃいし）。
それでもいつか、先輩が僕の想いに応えてくれる日を願いつつ、僕は明日も挑戦しようと思います。

彼女の憂鬱とその根源

「好きです！」

「嫌いです」

何なんだ何なんだ何なんだ！

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

私の名前は春日井奈々（かすがいなな）。

皆にクールと思われているらしい、ごく普通の一般女子高校生である。

今の場面は…ありていに言えば、私が告白されそれを斬って捨てた場面だ。

しかしこのやりとり…数えただけでも２０回は越えている。しかも全部同じ人で、だ。おまけにほぼ毎日。

しかも相手は学校では知らずと言われている奴だ。

色素が薄く、淡い茶色めいた髪の毛。透き通ったような白い肌とその身体、そして容姿は天使のように愛らしく美しい。さらに性格はおとなしめで優しいとの評判だ。

だから通称『天使くん』と名付けられ、私たち2年や3年の間では爆発的に人気を集めているらしい。

そんな奴が、どうして私に毎回毎回アタックし続けているのか。

そもそも、知り合いも少なく静かにこっそりと学校生活を送っていたこの私になのか。

そして、どうして私はこんなにも毎回手酷く振ってしまうのか。

私だって振るのは嫌なんだ。
毎回言われるのは公衆の面前でだし、終わったあとは人々の視線（特に女子の）が本当に痛いし。

でも、ちゃんとしたワケがあるのだ。

コトは、私と奴が同じ図書委員になった時から始まったのかもしれない。
私と彼が同じカウンター当番に当たった最初の仕事日。
当初、彼は傍から見ても、ものすごーーーーーーーくわかりやすいほど挙動不審だった。
入学したての1年生、ワケも分からぬまま当番に回されたのだろう。
（ここの委員会は一部の犠牲者がローテーションで当番になることで全員やらずに済むのだ。一番仕事多いしな。）しかも隣に上級生がいるのこの状態。緊張しているのも無理はない思ったが、図書委員のスペシャリストとしての誇りをかけて、彼に徹底的な指導をしようとあの手この手で彼に接しようとした。というのは建前で。

私自身彼に興味を持っていたのでちょうどよい機会だと思ったのが事実。
私は可愛いものが大好きだ。愛読書は少女小説。趣味は編み物や料理など。沢山のウサギやクマのぬいぐるみに囲われて寝るのが大好きなくらい可愛らしいものには目がない。（何故かクールな印象を持たれているらしいし、それを否定するのも自分の趣味を明かすのも恥ずかしいため、秘密にしているが。）
そんな私が、『天使くん』と同じ仕事に就いてしまった。
これはもう神が私と彼が仲良くなれと言っているとしか思えない。
と言うわけで行動を起こしたのだ。

実際見てみると噂に違わず可愛らしい容姿をしているのに驚き、隣に座っている女の私が惨めに思ったものだ。
しかし、段々と打ち解けてきてくれたのか少しずつ話し出してくれた天使くん。
普段あまり喋らない私だが、必死に話しかけた努力が報われたような気がしたものだ。
それに、いつのまにか下の名前で呼ぶようになってくれた。
可愛らしい顔から自分の名前が呼ばれる度に恍惚感を味わったものだ。

そんなささやかな幸福が終わったのはあの日。

非番だった私はいつものように人気のない夕方の図書室を利用して自宅から持ってきた少女小説を読みふけっていた。
クールな印象を持たれている以上、そのイメージを崩すのも気が引けるし何よりこの趣味を誰にも知られたくない以上、この時間帯は最高だった。だったのに。

そのとき、私は非常に盛り上がっていた。
様々な邪魔に阻まれつつも、ようやく結ばれようとしているヒロインと青年の場面。
その盛り上がっている場面を読んでいるときに事件が起きた。いきなり後ろから、

「なーなせーんぱいっ」

と静寂な図書館に場違いな高い声が響き渡り、彼の、天使くんの顔がにゅっと出てきたのだ。
私は驚いた。それはもう驚いた。
とっさに奇声とともに彼の顔面に読んでいた小説を投げつけてしま

い、気づいたときは後の祭り。
誰もいないと高を括っていたのがいけなかった。カバーもつけていないピンクの物体が彼の手元に。よりによってタイトルが『シンデレラのようなラヴ・ストーリー』。恥ずかしい。誰だって見ればすぐにわかるような少女小説のタイトル。
彼は唖然としていた。驚愕に近いような表情だった。あぁ、泣き出しそうな顔をして。
まさか…クールなイメージな先輩がこんな少女趣味があったとは思わなかったのだろう。

その後、彼は必死に謝っていたが、謝りたかったのはこちらの方だ。繊細な彼の心を傷つけてしまった。
それなのに彼は優しかった。私の趣味に対して何一つ聞かずに去ってくれた。
あぁ、天使くん、君は本物の天使くんだったのだね…と、その事件の翌日、もっと言えば登校するまで思っていたのだが。

彼に会った途端、告白された。白いレース柄のピンクの封筒付きで。

……は？

この時点で私の頭脳はめまぐるしく回り始めた。（自慢だが私は頭がいい方だ）
昨日の事件、そして今日の彼の行動…。
天使くん、私に対してクールなイメージを持っている→昨日、私の少女趣味を発見する→そして今、告白とピンクの封筒。→しかも公衆の面前。

そして一つの結果に行き着いた。
つまり。つまり、だ。
彼は私のクールなイメージを逆手にとって、昨日の少女趣味をからかいにきたのかっ！！
だからわざわざ公衆の面前で、しかもぴ、ピンクの封筒付きで告白したのかっ。
この瞬間、彼の天使像が破壊され、ついでに私の彼に対する優しい感情も崩壊した。
そして、植えつけられたのは憎悪。

許せない。乙女の夢を踏みにじったその行為、断じて許せん。
そして、牽制の意味として取ってもらえるよう封筒を真っ二つに破り捨て、「嫌いです」と応えた。
奴の行動は許しがたかったが、これでもうこんなことはしないだろうと思っていた。のに。

次の日、ピンク一面の花束を抱えながら告白された。
また次の日、某少女漫画のヒーローの台詞を引用したようなやたら恥ずかしい台詞で告白された。
またまた次の日、ピンクのクリームで『ＬＯＶＥ』とかかれた１ホールのチョコレートケーキを贈られた。
またまたまた次の日、下駄箱にどピンクの封筒が入っていた。薄く香水がついている。差出人は奴。内容は「すきです」
またまたまた…疲れた。

とにかく、終わりと思っていたのが、何故か、毎日、告白されるようになってしまった。
こんなに粘着質な奴だとは思わず、からかいの為だけに手の込んだマネをと最初のうちはそれら全てを一瞬で粉砕し続けていたのだが。

最近になって（ようやく）疑問に思い始めた。
毎回手の込んだ贈り物と共に２０数回も告白し続けるだなんて、純情な少年そのものじゃないのか。
最初の告白こそからかいだと判断して切り捨てたが、あれこそが間違いだったのでは、と思うようになってきたのだ。そして、彼のあの真剣な瞳。
返事を返すたびに彼の表情が傷ついたように見えるのにも、それを見て少し傷ついている自分の心にも気が付き始めた。彼に会う度に高鳴る鼓動も。

しかし、解せない。
もし彼の告白が本気だとしても、何のとりえも無い私にどんな魅力があるのだろう。
彼は、目が可笑しいのかもしれない。
私よりもお似合いの子が他にいるのではないか。
そうだ。
彼の申し出の真偽は定かではないが、せめて誤った道に進まぬためにも、ここは断固として固辞しようではないか！

そう考えたとき、胸が締め付けられた気がしたが、なに、胸ではなく腹が痛いのだ。昨日の夕飯があたったのだと考えなおし、これからも続くであろう彼の告白を断り続けようと決意した。彼には悪いが。

それに。

私は恋というものがわからない。
なったことがないから、わからないと言うしかないのだが。
だから、本当に彼が私を好いているのかどうかもわからない。

だが、もう少し、こうして近くで接してみれば、恋というものがわかるかもしれない。彼が本気の恋をしていると、わかるかもしれない。
彼には悪いが、もう少し、この状態を続けてみたいなと思っているのだ。

だから、今日も彼を振る。
これで終わりにしてくれという気持ちと、また明日来て欲しいという気持ち。
矛盾している、この感情。
一体どっちが本当の気持ちなのやら。

……それにしても、どうして毎度毎度プレゼントされるものが私好みなのだろう。
これはアレか、あの事件の嫌がらせなのか？それとも、彼の趣味なのだろうか…。

自称親友の観察とその分析

「好きです！」

「嫌いです」

おー、相変わらずやってるなァあの二人。
見ていて飽きないもんだわ。

よっす、俺の名は柿本（かきもと）　達也（たつや）。
みんなからは『たっつん』って愛称で呼ばれてるさー。
頭がツンツンだからかなっ。ま、いっか。
以後、よろしく！

…で、今の場面は、俺の親友があの『鉄の仮面を持つ女』に告白し、見事に玉砕しているところだな。
こう何回も何回もバリエーションの違う告白はなかなかお目にかかれないな。（しかも毎回公衆の面前てところがまた笑いを誘う）
２０数回も告白し続けるお前は偉いぞ浩太郎。

だが、相手が悪すぎる。
なんたって、相手は『彼女』だ。
コウちゃん（浩太郎のことだ）が俺に好きな人を教えてくれた時、中学校から親友を続けてきて、あれほど衝撃的な話はなかった。

どうして彼女なんだ！？というか、どこをどーやって惚れてしまったんだ！？

と、勢いで言葉責めをしてしまったが、彼は頬を染めつつもじもじしながら「内緒…」と答えやがった。
そのくせ、「ちょ、それはやめたら…」と言ったら「それはダメっ！」て珍しく怒るし。

それに、そんな可愛い仕草するなよっ男だろ！！
と、思わずツッコミたくなってしまったが、彼の名誉の為にその言葉を飲み込んだ。
勘違いしてほしくはないけど、俺にホモの気はまったくない。
むしろ、その言葉を聞いただけで鳥肌が立ってしまうぞ。

だが、そんな俺でも同姓であるコウちゃんの顔は可愛いと思ってしまう。
男女問わず魅了する顔ってこんななのかなって思ったぜ。
魅了、と言うより、可愛いとかきゅんときちゃうとか、まーつまり、童顔なわけだ。
本人は自分の容姿についてはかなり不満らしいけどさ。

おまけに、彼の物静かな性格も相まって学校じゃアイドル、いや癒し的存在になっているのだ。
同級生でも人気の彼だが、噂じゃおねーさま方が彼にすごく執心してるらしいな。
母性愛をくすぐりそうだもんなぁ…。

とゆーわけで、彼は学校じゃ結構有名な奴なんだが（本人は自覚なし）、まさか奴の恋する相手がある意味同じくらい有名な奴だとは…。

春日井　奈々。
俺たちの1こ上の先輩なんだが、こりゃまた有名人なんだわ。

んー、コウちゃんは可愛い系と言うなら、彼女は真逆の美しさを表した感じ？
流し目と黒子が実にあっている和風美人。あんな綺麗なおねーさんはモデルでも見たことないな。
だがこの美人、色々オマケがついてきて。
不気味、無愛想、無口、オーラが恐い、エトセトラエトセトラ…。

普段あんまり、いや、全然喋らずおまけに表情も動かさい、なのに喋ったと思ったら「何」「そう」「だから？」みたいな一単語ばっかりらしい。
そのために、あの美貌で群れていた野郎共はワケの分からん空恐ろしさで退散し、同姓の女子でさえ恐れるようになり、あの常軌を逸した美貌ゆえその噂は学校中に広まり、そしてついたあだ名が『鉄の仮面を持つ女』。
…ちょっとこの名はどうなんだと思うけど、ほんとにほんと。
実際クラスの連中と噂の君を覗いたとき、「なるほど」と思ったもん。
まったく、表情が崩れん。遠目で見ただけだけど、あれを間近で見る勇気はないぞ俺。

そんな奴がコウちゃんの恋のお相手…。
最悪な組み合わせの誕生かもしれん。
ま、この二人がくっつくのはかなり低い確率っぽいけどな。
現場を見てる限り、先輩容赦なくコウちゃんのこと切り捨ててるし。
俺は親友だからな、一応応援しといてやろう。

それに、コウちゃんも頑張ってるんだぜ？
最初に告白して、手酷く振られたってのに、諦めないで次の日から毎日毎日告白しまくり。

内気で喋ることが苦手なコウちゃんがあんなに積極的に行動をするのは珍しいもんだ。
告白される先輩にとっちゃたまったもんじゃないかもしれんが、報われてほしいと思う。

だけどさ。

「…どーして、毎回告白するときそんな手ぇ込んだことするんだ？」

「え？」

たったさっきまた振られたコウちゃんは、次なる告白のために早くも準備し始めていた。
や、告白に気合を入れるためにアイテムを使ったりするのはいいんだと思うんだけど。
コウちゃんは告白の仕方に異常に手を込めてると思う。
大量の薔薇の花束をわざわざ買ってきたり、手作りのハート型クッキーを焼いてきたり、あ、ケーキを作ってきたこともあったっけ。
結局俺が食べるハメになったけど。
とにかく、時間をかけて何かしら作ったりしている。

「なぁ、どーしてなんだよ」

「うーん、えとね…、きっと彼女はこういうのが好きなんじゃないかなって思って…」

思って…とごにょごにょ話すコウちゃん。
でもさ、どう考えたら彼女がそんな可愛らしいものが好きそうなんだと行き着くんだ？
いつも彼女が読んでいる本は、ほとんどが伝記や科学または歴史書

みたいなお堅い読み物ばかりらしいんだぞっ。

何回も断られる原因はこういうもののせいじゃないかと言おうと思ったけど…やめた。

彼女の為に一生懸命ラブレターを書いているコウちゃんの邪魔はしたくないしさ。

けどさ、何もそんなどピンクの花柄がついているレターセットじゃなくてもいいじゃん！！

…ま、色々とツコミたいところ満載なのだが、ここは落ち着いて。

彼らの行く末を生暖かく見守ってやろう。

彼女の妹とその語り

「好きです！」

「嫌いです」

…ったく、いつまでやってるんだろ、あの二人。

あ、ども、はじめまして。

あたしは春日井　実々（みみ）。

ここの学校ではある意味有名なあの春日井奈々の実の妹。

で、お決まりのこの場面はうちのクラスメイトの天使くんがお姉ちゃんに告ってるとこね。

いい加減にしてよーと思ってるんだけど、お姉ちゃんも頑固なんだから。ったく。

この告白シーン、私が見た回数だけでも３０は越えてる。

異常すぎない？この回数。

お姉ちゃんも折れてしまえばいいのに、断ってしまうのは、…やっぱりあのトラウマなのかなぁ。

うちのお姉ちゃん、あの容貌で学校では超無口で無表情だから学校では結構恐れられてるみたいなんだけど、家では別人みたいに話してくれる。

お姉ちゃんは極度の人見知りさん。

姉妹とは思えないくらいの美貌を持ちながら自信を持てないらしく

消極的だし、話し下手だから他人に誤解をされやすい。
ちなみにあたしは平々凡々な顔立ちで、割と社交的な性分。
ここまで似てない姉妹も珍しいとは思うけれど。

だから、『鉄の仮面を持つ女』と言われ始めてから一層そのイメージを崩さないようにしてる。
お姉ちゃん、可憐な少女趣味を持っているのを知られたら、また何か言われそうだと思ってるみたいで、あえてその呼び名に合わせて行動してるみたい。まぁ、大半は素だろうけど。
あたしが入学した頃にはものすごく有名な呼び名になってたから、よっぽど徹底してたんだなぁ。
あたしから見れば以外な趣味の一つや二つくらい、どうってことないと思ってるんだよね。
頑固なんだか臆病なんだかわけわかんない。でも、そんな風にギャップのあるお姉ちゃんは嫌いじゃない。むしろ超可愛いのよねぇ。

で、そんなお姉ちゃんの極秘趣味を偶然目撃した天使くん。
次の日に告白をしたみたいなんだけど、それをすぐ「イタズラだ！」と受け取っちゃうのはどうかと思うのよね。
確かに、告白だなんてイキナリすぎてびっくりしちゃうのはわかるけど。
でもでも、相手が天使くんなら、イタズラなんてありえない。

天使くんと少しでも話してればわかるもん。
彼、あの超〜〜〜〜〜可愛い顔を持ってるのにひけらかさないし、消極的でおどおどしてたりするけど、それでも話してればすごく良い奴だなって思う。
ほわわんと暖かいキモチになれるんだ。

それに、天使くんって人当たりは良いけれど、何かに執着を持って

ないカンジがするの。
だから、彼にアタックしてきたあたしの友達や先輩のお姉さま方は全て玉砕とのこと。
ちなみにあたしはもっさり３０代のダンディしか受け付けないので天使くんは対象外。
そんな天使くんが３０回も粘って粘って粘りまくってアタックし続けている。

いくら、最初はイタズラだと受け取ってたお姉ちゃんでもいい加減気づくと思うのよね。
彼が本気だってこと。

そうそう。
あまりにも撃沈する天使くんの姿が哀れなもんだから、応援しようじゃないかと思って恋のキューピッドの役割をしようと度々天使くんの話を振ってみてるの。彼こんなとこが良いよー素敵だよー落ちちゃえよー、みたいな感じで。
たいていは一蹴されるんだけどね。

この日も、ソファでだらけているお姉ちゃんに似たような言葉を投げかけたあたし。
天使くんを応援したいのはやまやまだけど、ほんとに、いい加減決着ついてほしいし。
当初はピリピリしてる雰囲気だったお姉ちゃんも最近はそんな気配納まってきてるし。
だからちょっとカマかけてみたんだ。

「お姉ちゃんさぁ、毎回天使くんの告白断ってるけど、ホントは結構まんざらでもないんでしょー？」

本気半分、冗談半分。
もしお姉ちゃんも天使くんのことを憎からず思っているのに断り続けてるのなら、きっと後に引けない頑固さが出てるのかもしんないしね。

そしたらさ、どうだったと思う？
お姉ちゃん、飲んでた牛乳一気に吹き出してむせてやんの。

ちょっ、こっちに牛乳吹きかけないでよー！と怒鳴ってるのに、お姉ちゃん、あたしの声も聞こえないカンジで茫然自失状態。おまけに顔は急に真っ赤っか。
え、なにこの反応。結構いい感じなんじゃん。
お姉ちゃん、それを否定するかのように「ち、違うのだぞ我が妹。こ、ここれは…これは、そう、鼻のなかに牛乳が入ってきてだな、私の生命の危機のためあえて見境なく吐き出し生命活動に必要な酸素を沢山取り入れようとして生命活動のために血圧が急上昇してだな…」とものすごーく分かりやすい反応をした姉ちゃん。や、さすがにその説明はキツいよ。しかも言ってること支離滅裂だよ？

…なぁんだ。
この鈍感な姉でも３０回越えればようやく彼の恋心も本気だと気づき始めたのね…というか、昨日とは全く違ったこの反応…何かあったのかな？

ともあれ、よかったじゃん天使くん。彼の努力も報われそうで何よりだね。
お姉ちゃんも素直じゃないなーとニヤニヤしていたらばれたらしく、「違うと言っとるんじゃボケー！」と、酢だこのような顔のまま、あぐあぁぁぁと奇声を発しながら走り去ってしまった。牛乳を手にしたまま。

こーの恥ずかしがりやめ。

んー、これじゃあお姉ちゃんが落ちる日も遠くないかもなぁ。

紅茶に映った自分のにやけ顔を見ながらそう思いつつ、優雅にそれを飲み干した。

彼女の妹とその語り（後書き）

ようやく補足完了しました。
3，4話だけという、何とも中途半端な載せ方をしてしまって申し訳ありませんでした。
連載当初から読んでくださった方や、初めて読まれる方にも楽しんで読んでいただけるよう、頑張っていきたいと思います。

彼の念願成就とその行方

「好きです」

「……え？」

あ、あれ…？

い、いつもの僕の台詞が先輩から発せられてる…って、え、あ、あれ？

「せせせせ先輩っ！？な、奈々先輩！！」

「ん？なに浩太郎」

あ…嗚呼、久しぶりに僕のことを呼んでくれた先輩。しかも笑顔付き。

そろそろ４０回を迎えようとしている告白。

いきなり先輩から告白されました。

こ、これって…せ、先輩っついに僕の気持ちが届いたってことですか！？

「あ、あの…奈々先輩…」

「だから、なに浩太郎。

なにか言いたいことでもあるっていうのか」

「や、それはもういろいろと聞きたいのですが…じゃなくて！

せ、先輩、あの、その、う、えーっとですね…も、もう一回…言

ってくれませんか？」

「『ん？なに浩太郎』」

「そこでボケかまさないでくださいっ！
前っ、その前です！！」

「好きです」

ぐはあっ！
僕はそこで泣き崩れました。号泣です。
うれし泣きってやつです。
だって…だってだって、今まで想い続けてきた先輩の口からそんな言葉を聞けるだなんて！
一瞬信じられずにもう一度聞いてみてよかった…これは現実なんですね！
嗚呼、最初の頃はラブレターを真っ二つに引き裂かれ、数々のプレゼントと共に散った僕ですが、ついに、ついに春がきましたよ。
いやっほい僕！！

そんな感じで完全に舞い上がっていた僕。
先輩は少し戸惑いながらも続けて言いました。

「今まで…すまなかった。
浩太郎を試すようなことをしていたのだ。
本当にすまないことをしたと思っている。けれど、ようやく、自分の気持ちに気が付いたのだ。
お前が、好きなのだと」

「な、奈々先輩……」

「大好きなのだ」

う、うわ…ど、どどどどうしようこの甘い雰囲気。
今まで味わったことのない甘さです。
あ…先輩がどんどん近づいてくる。これって、もしかして…？
もう心臓破裂しそう。足がガクガクして、立っていられない。
め、目伏せなきゃ。えっと…

「奈々先輩…僕も、僕もずっと大好きでし」

「起きやがれーーーーー！！」

……ハッ！！
あ…れ、ここ…どこ？
ん、時計…？7時30分前。ここは、……僕の部屋？……と
言うことは！？

ゆ、…夢！？夢なんですか夢オチなんですか！！
え、ちょっとまって嘘でしょう。

けれど、現実は目の前に。

先輩と思って抱いていたのは、お気に入りの等身大サイズのウサちゃん。
そして、視線をその先に向ければ僕の姉が。
ようやく、覚醒し始めたとともに、僕の中で色んなものが崩れ始めました。
そ、そんな…先輩の告白全部が嘘だったなんて…。
「う、嘘だあ…」
「なに泣きそうになってんのよ。て、うわっなに号泣!?
学校に遅れそうだからって、せっかくこの姉さまが起こしに来てやったのだというのに。
そんなに寝足りなかったの？っていうか鼻水垂らすなっ！涎も拭く！」
そうじゃない、そうじゃないんです姉さん。
僕の…僕の……
「夢が台無しだーーー！！」
「意味わかんないっつうの！」
ゲンコツをもらった。
けれど、その痛みより心のほうがダメージ大きすぎます。
今更ですが、よくよく考えてみれば都合の良すぎた展開でした。
先輩が、下の名で呼び捨てで呼ぶなんてことなかったのに。
笑顔なんて、めったに見せない人なのに。
色好い返事がもらえないのが続いたからって、きっと気弱になっ

ていてあんな夢を見たのですね。反省。
あまりにも都合の良すぎる夢に甘えてしまいました。
改めて先輩への想いを確認する。
そうです。こんなことでへこたれてる暇はありません。
あまりにもあの夢とかけ離れて厳しく辛くても、現実に目をそむけてはいけないのです。

それに、厳しいだけじゃない。
最近になって先輩の態度も柔らかくなってきた気がします。
僕のこと、少しずつ受け入れてくれたってことなのでしょうか。
だったら、いいな。

…よし。
あの夢を現実のものにするためにも、今日も頑張っていきましょう。

「…って、あたしを置いてくなー！」

「はうっ」

とび蹴り。
…結構かっこいい感じで締めくくったのに、姉さんまだいたのですか。
さすがにとび蹴りはないでしょう！？

「…たく。
最近、あんたの様子おかしかったからどうしたのかなと思ってたのに…その顔見れば大丈夫そうね。
泣き出したかと思えば急に顔赤くなるし。
ふふん、さては好きな女の子のことを考えていたのか」

図星。
でも、…こんな暴力的な姉さんでも心配してくれたんですね。
「大丈夫です。僕は復活しました」
これからも想いをぶつけていきます！
ありがとう、姉さん。
「けどなぁ…あんた、暴走しがちで自爆タイプだし、ほどほどにしとくのよ」
…少し、感謝したことを後悔。
ともあれ。
最初に告白したときのような情熱を再び燃え上がらせ、今日も今日とて先輩へこの想いを伝えようと頑張ります。

でもせめて、先輩とちゅーするとこまで覚めないでほしかったな。
本っ当に惜しかったのに！！あ。へ、変態じゃないですよ？健全な男の夢です。

彼の念願成就とその行方（後書き）

時間的には全く進んでません；
ただ、何十回も断られ続ければさすがの彼も弱気になるんじゃないかなーと思って書きました。…若干、違う方向に行ってしまいましたが。
彼の想いも再確認したところで、次回辺りは一気に動き出してくれるといいな。って、私次第ですね…。

たぶん平穏なる日々とその崩壊

■　彼女

今日から6月である。
私が彼の告白を受けて…いや、受け続けて2ヶ月が過ぎようとしている。
日々が過ぎるのはこんなにも早かっただろうか。
毎日が彼の告白という奇怪な行動のせいで目まぐるしく過ぎていく。

そう、私はまだ彼の告白を受け続けているのだ。
いい加減、この曖昧な関係をハッキリさせようとは思っているのだが、シャイな私は中々素直になれず、つれない態度を取り続けている。
今わかってきているのは、彼に対する見方がマイナスでなくなってきているということ。
こんなにも冷たい反応を返しているのに、彼は告白をし続けている。
これはもう、からかいとは程遠く離れた行為だと判断する。納得せざるを得ない。
未だに何故彼のような神々しい存在が地味でちんけな一般人である私に興味を持っているのか疑問に思わずにはいられないのだが。

だがしかし、彼の誠実な想いだと判断したからには、いくら恥ずかしくともそれ相応の答えを返さなくてはならないだろう。もう、逃げられないのだ。向き合うしかない。
つきあうつきあわない云々はおいといて、…おいといて、今の私の正直な気持ちを彼に伝えようと思う。

…こう決意できたのは、まぁ、先ほどの妹との会話で自分の気持ちに気づけたからなのだが…我が妹には言うまい。
さあ、反撃開始だ。

■　彼

緑がよりいっそう美しく見える5月が過ぎ、僕の愛すべき季節の一つ、そう、雨がよく降る6月がやってきました。
静謐な雰囲気を醸し出す雨。ああ、なんと素敵な時期が来たのでしょう。
毎年この季節になると妙にウキウキになれる僕なのですが、今年ばかりはあまり降ってもらいたくないのです。

奈々先輩に告白をし続けてもう2ヶ月が過ぎようとしています。
先輩に告白するたびに、僕の気持ちを言葉以外にも実感してもらおうと思って毎回手づくりのプレゼントを贈っています。
そのプレゼントはどれも繊細に作ったものだから雨に濡れただけですぐグシャグシャになってしまうのです。
それに…考えすぎかもしれませんが、雨が降っているとき周りって見えにくいでしょう？
僕の想いが雨によって先輩まで届かないかもしれないって思ってしまうのです。
…重症ですよね。
けれど、どうか。
僕の気持ちがハッキリとあの人に届くように、先輩を雨で隠さないでください。

（ああ、でも雨さん！僕は貴方のことが嫌いというわけではないのです！むしろ大好きですよ！！あ、奈々先輩と比べるとやっぱり

先輩の方が…って、ちょっとまって怒らないでください！ただ貴方に嫉妬しているだけなんですから！

■　自称親友

俺の愛しの親友は今日も今日とてあの高嶺の花を我がものにしようと頑張っている。
…ほんっとに、よくやるよなぁ。
ま、鉄の仮面の君もまんざらじゃあなさそうだしな。
本気でコウちゃんのことが嫌いなら、ここまでこんな茶番付き合うはずがないし。
って、もう6月になるんだなぁ。

でも、そろそろ決着つかないとヤバいんじゃあないのか？
今まで大人しくしていたみたいだが…ヤツら、コウちゃんのファンはそろそろ堪忍袋の緒が切れそうだぜ？（ファンと言うより親衛隊か）
親友としては、どうフォローに回るかが微妙なとこなんだが…ここは鉄の仮面の君の妹君にでも頼ってみっかな。クラスメイトだし。
うわっ！いい口実つくった俺！
実のところ、あの超絶美人のお姉さんよりも気さくなクラスメイトの妹さんの方が気になるんだよな。
これがきっかけになって仲良くなれば一石二鳥だぜ。
やるぜ、俺。

■　妹

…マズいわ。

ヤツら、今の今まで天使くんの愛の行動とお姉ちゃんの様子を黙認してきたみたいだけど（ありえない組み合わせだから大丈夫だと高を括っていたのかしら）…最近、二人の間で少しずつだけどピンクなオーラが漂い出してきたと察知したみたいね。
ま、この間のお姉ちゃんの反応を見れば、そう遠くないうちにくっつくだろうとは思ってはいたのだけど。
女は人の恋には妙に敏感だしね。それに的はあの有名な天使くんだし。

でもホント、そろそろだとは思っていたけど行動に出そうね。
さっき話しかけてきたクラスメイト…えっと、なんだっけ…あ、たっつんって言ってた人（へんなあだ名、にやけ顔がキモかったわね）、あいつが言ってた通り、ヤツらは我慢の限界かもしれないわ。お姉ちゃんのこと、気にくわない存在だろうしなぁ。
自分たちの愛する天使くんがある意味有名なあたしの姉とくっつきそうになっているんだもの。
ハタから見れば毎日ちわげんかしてるみたいなバカップル同然な感じだし。
あたしでもイラっとくるほどよ。
でも、あたしから見れば、ヤツらの存在自体が気にくわないんだけどね（特にあのエセ嬢様がいるってこと時点でサイアク）。

…たく。
我が愛しの鈍感で恥ずかしがりやのお馬鹿な姉上のためにも人肌脱いでやりたいとこなんだけど、はてさて、ヤツらはどう仕掛けてくるのかしら。
ま、あの高飛車馬鹿女が大将なら、ちんけな作戦だろうけど。
受けて立ってやろうじゃないの。姉の恋路を邪魔する者は、馬に蹴られてあたしに殴られるべきなんだから。あー、楽しみっ。

■ヤツら

みなさん、ごきげんよう。

6月1日の今日、こうして朝早くお集まりいただいたのは他でもない、我らが崇高する天使くんの危機が発生しそうだからですわ。

皆さんもご察しの通り、そう、あの倣岸不遜でつり目で高慢ちきな鉄仮面女とのことです。

彼女、甚だしくも天使くんを狙っているとのことじゃあないですか！

4月の入学式から「愛天使同盟」をつくり、天使くんの快適な生活を作ろうと日々健気に努力してきたわたくしたちにとって、あまりに酷くはありませんか。

あの魔女の魔の手から天使くんの純潔を死守するために、一同奮起することを提唱しますわ。はい、皆さん賛成ですね。そうですよね？まさか嫌だとは言いませんよね？

…皆さんがわたくしの意見に同意を示していただけて、わたくし、本当に嬉しいですわ。

それでは改めて。

これから天使くんを悪の道へと行かないよう、我々の手で清く正しい道を歩んでいただけるように一同奮起することを宣誓しますわ。

指揮を取るのは会長であるこのわたくし、安部川天利奈（あべがわあまりな）でよろしいですわね？

作戦は既に作っておりますわ。

今日の昼休み、調査書通り普段天使くんと魔女の密会場所である中庭の噴水前で待ち伏せし、天使くんが現れる前に魔女を追放するのですわ。ふふ、なんて名案でしょう。

さあ、ゆきますわよ！

たぶん平穏なる日々とその崩壊（後書き）

約2週間ぶりの投稿です。…な、難産でした；
最近筆が進まずヤキモキしていたのですが、無事投稿できてよかったです。
波乱前の彼らの様子。でも一番書きたかったのは最後の”ヤツら”だったり。
次回でおおいに動いてくれることを願って。…勝手に暴走しそうですが。
段々と佳境に入ってきた模様。
これから無事畳んでいけるのかどうか不安ですが、コメディということを忘れないように執筆していきたいと思います。

彼の逃走と彼女の追撃―彼

「ちょ、ちょっと落ち着きましょう奈々先輩っ」

「これが落ち着いていられるかーっ！！」

昼休みという貴重な休み時間、僕は愛しの先輩から追われています。

あっれーいつもと逆パターンだぞやっほい。

いっそ先輩に飛びついちゃ…えるわけないじゃないですか！！今マジで怖いんですよ先輩。何片手にヤカン持ってるんですか殴る気まんまんですかちょっと！

…あれ。

そもそも、どうして僕は追われてるんだっけ？

―5分前―

決戦の時が、きた。

僕は、今まで背いてきたことを、真正面から向き合おうと決意したのです。

「…とかなんとか言っちゃって、さっさとお姉ちゃんを落としてくれればこんな面倒くさいことになんかなんなかったわけなの。わかる、天使くん？」

「…ちょ、ちょっと今かっこよく決めようとしていたのに実々ちゃん！」

「なぁにがかっこよくよ。
３０数回も告白し続けて振られてる男に言われたくないわ」
「…おいおい実々ちゃん、そりゃあコウちゃんが可哀相だぜ。
あんなにも情熱的な告白を俺は見たことがないね！」
「うっさいわね、ボンクラ。
そもそもなんであんたがここにいるのかが意味不明で理解不能なのだけど、オーケー？」
「それはホラ、俺はコウちゃんの親友だし当たり前だろ？…っていうか！実々ちゃん俺はボンクラじゃなくてたっつんだよ！？」
「フッ」
「…え、なに、今なんか俺笑われた？
というか、なにその侮蔑入った笑いは！？」
「え、必死な姿がちょこっと哀れに思えただけだよ？」
「そこだけ疑問系かよ！！気になるじゃねえかー！ああでもその笑顔が可愛いぜこんちくしょー！！」
「ちょ、ちょっと落ち着こうよ二人ともっ、ね…って、あ！先輩」
６月１日の昼休みの噴水前、の脇の茂みの中。
どうしてこんなところにいるのかと言うと…。
いつも通りに先輩へ愛の告白をしようと待ち構えていたら、やけにテンションの高い先輩の妹兼クラスメイトの実々ちゃんとたっつんに両脇から捕まえられ、気づいたらここにいた、のかな？…思い

っきり引き摺られたので記憶が曖昧です。。

と、ともかく、せっかくの先輩への告白タイムが失われると半ば怒って二人に抗議しようとしたら、実々ちゃんの「今日こそはお姉ちゃんのハートをがっちりつかめるいい案があるんだけどな～」の一言で居座ることに。

「……でも本当なの実々ちゃん。
先輩もうこっちに近づいて来てるよ！？ぼ、僕普通に告白すればいいの！？」

「落ち着け天使くん。
まだ我々の姿は見えてないはずなのだよ。」

「…なんかのってきてるなぁ」

「おだまりボンクラ。
…いい、天使くん。今は１２時５０分。
お姉ちゃんには１３時に噴水前で待っててって言ってあるからまだ時間はあるのよ。
で、ココからが本題。
…その前に、あなたホントにお姉ちゃんのことが好き？」

「好きです」

「どんなことがあっても？」

「どんなことがあっても」

「どんな困難が待ち受けようとも？」

「ど、どんとこいです」
「ホントに？」
「はい」
……え、な、なんですかこの問答は。
僕、本当に実々ちゃん信じてもいい、んだよ、ね……？
「…まあ、今までのキミの実績を見てればわかるんだけどね。一応よ。
今からやることは、天使くん崇拝者がいなくなるようなものだし。
…この案をやれば、もうチヤホヤされなくなっちゃうかもよ」
「実々ちゃん。
僕は、先輩の心さえ僕に向いてくれるなら、悪いけど他の女の子たちは眼中ないんだ。
だから…だから、」
「あーっ！！
もうわかったよコウちゃん。どんなことが起こっても俺はお前の味方だ、親友だ！！」
「たっつん……」
「はいはい、三文芝居は置いといて」
「ひでえ……」

「うっさい。
ま、案って言っても簡単なことよ。いつもの告白をちょこっとアレンジするだけだし。
天使くん、キミいつも告白するとき『好きです』って言ってプレゼントの類を渡すわよね」

「う、うん」

「その台詞を言い終わった後の”プレゼント”をキスにすればイチコロだよ、きっと」

「は」

「え」

「え、えええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

あっバカってたっつんの焦った声が聞こえたような気がしたけど、それどころじゃなかった。叫びましたよ、思い切り。
だだだだって、いきなりちゅ、ちゅーですかっ！？ちょ、ちょっとまって僕と先輩はまだ付き合ってないわけで、でも一番いい案って実々ちゃん言ってるけどでも僕まだ心の準備がというよりまだ僕付き合ってないわけで……。

……はっ。
し、しまった。大声で叫んでしまいました。と、いうことは。

思わず噴水を見やる。
せ、せせせ先輩こっち見てるーーー！！ちょ、こ、こっち来ちゃいますよ！！

「あわてないの天使くん。
いい、公衆の面前で堂々とべろちゅーでもかましてやれば、さすがの取り巻きたちも自然と離れていくって。それにお姉ちゃんはああ見えてロマンチストだから、キスが一番弱いのよっ」

「ちょっとまって、さっきまでキスって…べろ？」

「とりあえずキスよキス！！
あっもうお姉ちゃん来ちゃったからあたしらは退散するわ。アディオス！」

そんな大胆なことを言って去らないでくださいー！！
たっつんも、置いていかないでー！！走っていかないでー！！
…あ、先輩が目の前に。

彼の逃走と彼女の追撃―彼（後書き）

…お久しぶりの投稿です。
少し長くなったのでひとまず区切ります。

彼の逃走と彼女の追撃―彼女

お昼休み、妹の実々からメールで呼び出され噴水前にきたものの妹の姿が見えず、またしても時間破りかとほとほと呆れながら待ちぼうけをくらっていた。

時刻は午後の1時前。

昼休みの真っ只中で、ここの中庭には大勢の生徒で賑わっている。

いきなりの呼び出しだったため、先生から管理人へ返却を頼まれたヤカンを手にしたまま待っている姿は少し滑稽ではないかと思いつつも面倒くさいので気にしないことにする。

それにしても、実々は一体何の用事なのだろう。

姉は天使くんへの思いの丈を告げようと一世一代の決心をし、いつ天使くんが現れるか待ち構えているというのに。

今日こそは、天使くんから言われる前に、私から反撃をしてやるのだ。

そうだ、自分から行かないのはただ恥ずかしいというわけではなくて相手の不意を突いた作戦なのだ、と心の内で言いながらもつい周りを見てしまう。（彼は突拍子もなく現れるのだ）

見わたすと、前方に見知った顔を見つけた。

アレは…誰だったか…。

えーと、確か縦巻きくるくるロールで…確か同じ学年の…え、あー、安部、安倍川…？

安部川あまる、あまりー…あま「安倍川天利奈（あべかわあまりな）ですわ！」

あーそうそう、あまりな。縦巻きロールは覚えていたのに名前を

忘れるとは。

「……て、今なんで私の前に？」

私の心の言葉を見透かしたのか！？と焦ったのだが、違ったようだ。

「先程からお声をかけているのに、無視されるなんて随分お高くとまっていますのね！

さすがは清らかなる天使くんを惑わす魔女ですこと！」

いや、多少は耳に入っていたのだがどうしても天使くんのことを考えると回りがおろそかになってしまうようだ。

確か「愛天使同盟」とかいう会の会長らしい。いつのまにこんなファンクラブがとも思ったが、天使くんのために秘密裏に作ってあったらしい。

…て、魔女呼ばわりか。随分な言われようだ。

気がつけば、天利奈を先頭に約２０数名の女子たちが私に向かって鋭い目を向けている。

鋭い女のカンで言えば…この感情は、敵意。

「その安部川さんが、この私に何の用なのだ」

「貴方もわたくしたちが何をしに貴方の元へやってきたのかわかっているのではなくて？」

「いや、まったくわからないのだが」

「即答せずに、少しは察してくださいまし！」

いや、そんなことを言われても…と言い訳をしようとしてもその隙を与えず安部川は言い募る。

「良いですか、わたくしたちは天使くんを悪の道へ導かれるのを阻止するためにここへやってきましたのよ。
天使くんの心を尊重し、最初こそはと思い見守っていましたけれど、天使くんの告白回数３４回を越した今、貴方方の間でいかがわしいオーラを察知いたしましたの！
わたくしたちが今まで行動を起こさなかったのは天使くんが安全地帯にいたがため。それを…貴方のような魔女に唆されあげく、まさに毒牙にかかれようとしている彼を、放っておけるものですか！」

「……随分な啖呵をきったものだな。
だがしかし、私は断じて自分から彼を唆そうとしたことは一度もない！
今から初めて彼を唆そうとしているところだ」

「そう、だから貴方のような方は即刻……え？
い、今なんておっしゃいましたの？わたくし雑音を聞き逃してしまわれたようなのですが…」

「まったく…毒牙にかかったのはこっちの方だというのに」

ボソッと呟いたが聞こえていたようだ。（なんだ、耳が良いほうではないか。）
「ウキャー」とか「ムキョー」とか何だかわからんがとりあえず皆して奇声を上げている。…奇妙な光景だ。。
そこにもうひとつ奇声が混じった。

「え、えええええぇぇぇぇぇぇぇ！？」

…なんとも可愛らしく高い声で叫ぶ者がいるなと振り向いた先には天使君くんが。
何故、道から外れた茂みにしゃがんでいるのかわけがわからんが、まぁどうでも……

……待てよ。
もしかして、今の会話を聞かれていたのだろうか。
ということは私の「唆す」発言も……わー！わーー！！

な、何ということだろうか。ちゃんとした気持ちを伝えようと思っていたのに、こんな形で伝わってしまうなんて。
しかし、よく考えてみればあの姿…まるで隠れてるような体勢じゃないか。

まさか、彼は私を待ち伏せしていたのだろうか。そんな考えが浮かんだ途端、急に何故か　悲しいような苦しいような感情が芽生え、それは怒りに変わり、
気がつけば憤然と彼に向かって走り出していた。

彼女の迷走と彼の困惑

息があがる。

天使くんを見つけたときは、恥ずかしさと怒りと何かが混ざった感情を
とにかく彼にぶつけたい衝動に駆られて追いかけてしまったが、体力の限界を
感じつつある今、なぜ彼を追いかけていたのかその理由も走っているうちに薄れてきて、
彼に追いつかなくてはという焦りのみが頭を支配する。

中庭から学校の階段を駆け上がり、
廊下を駆け抜け、驚く生徒たちをくぐりぬけ、
階段を駆け下り、ふたたび中庭へ。
ひたすら彼を追い続ける。

ふと、今の状況は普段とまるで立場が逆じゃないかと思った。
私が彼を追いかけ、彼が私から逃げる。（…逃げる？）

息があがる。
（苦しい）　（苦しい）
追いつかない。振り向いてくれない。私が嫌いになったのか？
（苦しい）
…だから逃げているのか？　（苦しい）（――悲しい。）

――――あれ。

ストンと今まで抱えていた感情に気づいた。

いや、ずっと知っていたのに、知らないフリをしていた。

彼は最初から今までずっと真剣に私に向かってきてくれていた。
なのに私は彼から向けられる感情が不可解で不思議で…すこし怖くて。逃げた。
それをごまかすように、いつも冷たい態度で彼を突き放してしまって。暴言を吐いて。
あれらの告白が自分の趣味が知られてしまったからのからかいだなんて、もう思えない。

私は—あまりにも彼の感情を軽んじていた。
なんて私は愚かなのだろう。
さんざん彼を傷つけた私が何をいまさら「唆す」？
それは、、あまりにも彼に失礼ではないか。
むしろ一向に止まってくれない彼は、もう私に愛想が尽きたのではないか？

そう思った途端、胸が締め付けられるような鋭い痛みがはしった。

ああ。　私、彼のこと。
ようやく自分の感情に気づいたのに、向き合おうと先日決めたはずなのに、もう手遅れだ。
彼は追いかけてくれない。今まで逃げていたツケが回ってきたのだ。

ずっと君は、私に断られる度にこんな悲しい気持ちになっていたのかな。
今さら私が君に好きと言っても、君にとっては重荷になるのかもしれないな。

すっかり身体が限界だったことを忘れて、自分の思考に気を取られ―
フッと足の力が抜けた。
「…奈々先輩っ！」
私を呼ぶ―焦ったような声を聞いたのを最後に意識が遮断された。

＊　＊　＊　＊　＊

激しい金属音に振り返り、奈々先輩が倒れている姿が目に入った。
それまで走りながら考えてたこと―実々ちゃんによる「ちゅー」計画だとか、
何故先輩に追いかけられているのだとか―諸々ぶっ飛んだ。
声をかけても反応しない先輩を抱えて、急いで保健室へと僕は向かった。

「うん、貧血ね」
「貧血…」
彼女をベッドに寝かせたあと養護教諭に聞けばすぐに答えが返ってきた。
「大丈夫よ、少し休めばすぐ目が覚めるだろうから。
むしろあなたの顔が真っ青でこっちが病人かと思ったわよ。
まぁとにかく、彼女はしばらく寝かせておきましょう」

そう言い置いて先生は用事があるからと出ていき、部屋には僕と眠っている先輩が残された。

貧血…。

先輩が倒れるまで気づかなかったなんて、僕は…。

わけも分からぬまま始まった逃走に、少しだけ浮かれていた自分が恥ずかしかった。

最近、先輩の態度が柔らかく感じたからって調子に乗りすぎたんだ。

追われた原因は分からなくとも、知らない間に先輩を傷つかせるようなことをしてしまったのかもしれない。

今日、実々ちゃんに無茶なアドバイスも受けて（あまり参考にはならなかったけど）今度こそはと思っていたけれど…。

「……ん」

「…っ！　奈々先輩、大丈夫ですか？！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7292d/

ＶＳ

2011年10月10日12時45分発行